

大連懐かしの歌

秦源治

(大連常盤小、大連二中、南満工専卒)

私たち大連っ子が、彼の地で生まれ育ち学び、そして遊び暮らした当時には、「わたしたち」、「ペチカ」、「こな雪」、「たかあしおどり」、「南満本線」、「居庸関の早春」等々、忘れ難い思い出の歌がある。これ等は喜多由浩著『満洲唱歌よ、もう一度』（(株)産経新聞ニュースサービス刊、2003年）に詳しい。

しかしながら、米寿の齢を重ねた今の私にとって、特に懐かしい思い出の歌といえば、「大連市歌」、「大連行進曲」、「大連引揚げの歌」の三つが挙げられる。

【その一】

「大連市歌」は、大連っ子なら誰でも知っている歌であろう。大連市制20周年記念行事として昭和10年（1935）4月、市民より市歌を募集（1等賞金200円）することになり、同年7月5日、応募歌詞135編の中より、1等当選は下藤小学校校主席訓導高野運太郎氏と発表され、その作品は市歌として比類稀な傑作で、各方面から激賞されている。引き続き全国から作曲を募集（1等賞金500円）し、同年8月31日に、応募曲譜488編の中より、当選者は東京府土木部経理課雇の石塚寛君という26歳の青年で、日本大学芸

術部音楽科の出身と発表された。さきに、「満洲国皇帝陛下奉迎歌」にも1等に当選した秀才であった（以上の要旨は、『大連会会報』第45号よりの引用）。

引揚げ後、私たちが同窓会などの会合でよく歌ったのは、第一は出身母校の校歌、続いて満洲国国歌（のちの満洲国建国歌・天地内有了新満洲……）または大連市歌、それに前記満洲唱歌の数々であった。

「大連市歌」は、満蒙の玄関口・日満親善の魁を自負して大連の発展を涇洌と、勇壮活潑な歌詞とメロディーに乗せて歌いあげ、みずから誇らしげな気分を満たされて市民に親しみ愛された歌でした。内地での辛い生活に落ち込んだ時、自然に口ずさむこの歌は、当時全国を風靡していた並木路子の「リンゴの歌」とともに、我々大連引揚者に生きる勇気を与えてくれる歌でもあった。

因みに、大連市制は大正4年（1915）10月1日に施行せられ、大連市役所を西通りに設置、同年11月2日に開庁式を行なった。人口邦人37,783名であった。大正8年（1919）4月、大広場に新庁舎が竣工し、西通りから移転した。昭和10年（1935）10月、大連市制20周年記念

式典が挙行され、昼中は旗行列、夜は提灯行列が市民参加で盛大に行なわれ、小学児童も大連市歌を歌って行進したという。当時の満洲景気を反映して人口も急増し、この年には377,000人に達した。

大連市歌

作詞 高野運太郎

作曲 石塚 寛

一、世界の平和護（まも）りつゝ 尊（たふと）き歴史こゝにあり こゝ大連は満蒙の さきがけの地よ譽（ほまれ）なれ 我等は市民限りなき幸（さち）をいのらん大大連の

二、東亞にはほこる大埠頭 欧亞を結ぶ大鐵路 日に日に集（つど）ふ文明の姿はこゝに驗（しるし）あり 我等は市民手をとりにて とともに擧（こぞ）らんその道々に



大連の中心大広場市役所の偉観



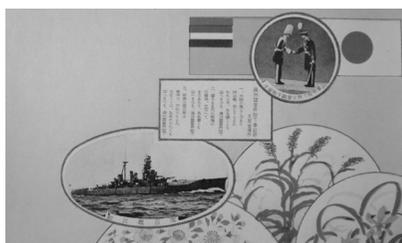
輪奐美麗なる大連警察署



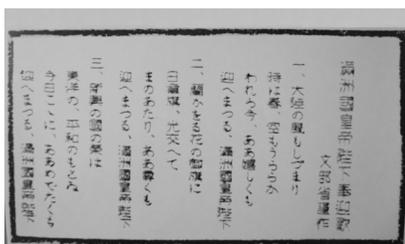
東洋一を誇る大連埠頭の壯観



宏壯華麗を極む大連駅頭の盛観



満洲国皇帝と秩父宮・奉迎歌・御召艦「比叡」日満両国旗に桜花と高粱と蘭花



満洲国皇帝陛下奉迎歌（作曲：石塚寛）

三、櫻（さくら）は咲きて潔（いさぎ）よく 蘭花（らんか）はかをりとこととはにかゞやく盟（ちかひ）共榮のはえある先驅（せんく）に起（た）つ我等 晴れたり空はおほらかに 大大連は力あふれて



星ヶ浦の丘上に立つ後藤新平伯の銅像

【その二】

「大連行進曲」も昭和10年頃の作らしい。連鎖街の自宅にあったレコードの中の一枚に、A面「大連市歌」B面新民謡「大連行進曲」というのがあって、子供心にも感ずるものがあつたのか、手回し蓄音器にレコードをかけては、よく聴いたものである。「大連市歌」の方は誰方もご存知のように、こちらの方こそ行進曲風に元気溼漉なあめ曲です。

一方「大連行進曲」は、作詞者・作曲者の名は一切記憶になく不明ですが、歌詞は大連の情景を今に彷彿とさせ、メロディーは行進曲とは似ても似つかずにやゝ物静かで、ほのかにノスタルジアを感じさせられます。

この歌を口ずさむと、ありありと昔の大連の街並が浮かび上がってきます。歌詞の全部は覚えていませんでしたが、偶然にも古本屋の古書展で見付けた小冊子「大連案内」（昭和10年8月25日、大陸出版協会）の巻頭に第1等当選の「大連市歌」、巻末に大連情緒として新民謡5編が掲載されており、その第1番がこの「新民謡・大連行進曲」でした。

恐らくは「大連市歌」と同様に公募して、その当選第1等作品であつて、ともにA・B面にレコード化されたものと思われます。

論より証拠、その歌詞と関連の風景を、次にご披露しますので、しばし往時を偲んでいただきます。

新民謡 大連行進曲

作詞・作曲者ともに不明

一、烟（けむ）る陸橋（りくきょう）

あの日本橋

新京通（かよ）ひの

鐘が鳴る

狭霧（さぎり）降るのか

瞳（ひとみ）の中に

今日も日暮れて

灯（ひ）が揺れる



規模宏大なる大連駅より日本橋を望む



美麗なる大連日本橋

二、昔露西亜（ロシア）の

あの夢の跡

今じゃ戒克（ジャンク）の

影寂し

赤い小旗に

夕陽が映えて

風も涼しく

黄昏（たそが）れる



大連露西亜波止場



大連倶楽部（のちの日本橋図書館）

三、大連富士の

あの裾麗（すそふもと）
 春は現（うつつ）の
 星ヶ浦
 櫻求めて
 ドライヴすれば
 自動車（くるま）の屋根に
 花が散る



大連郊外星ヶ浦の風光



大連郊外星ヶ浦海岸より岬を望む

四、萌える若葉の

あの放射道
 空も碧（みどり）に
 氣もそゞろ
 何處（どこ）に行こうか
 大廣場（ひろば）の眞中（なか）で
 華美（はで）な日傘が
 立ち止まる



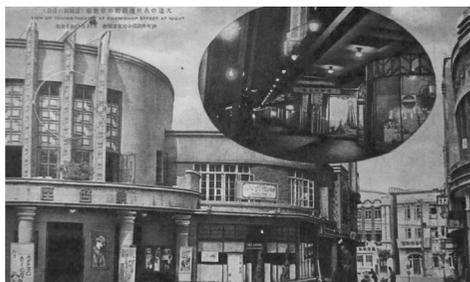
飛行機上より鳥瞰した大連市の中心大広場公園とその周囲



大連ヤマトホテル

五、夜の大連

あの連鎖街（れんさがい）
シネマ歸りか
靴の音
ペーブメントに
ネオンが咲いて
行きつ戻りつ
夜も更（ふ）ける



大連の名所連鎖街の常盤座（円内 連鎖街常盤町通りの夜景）



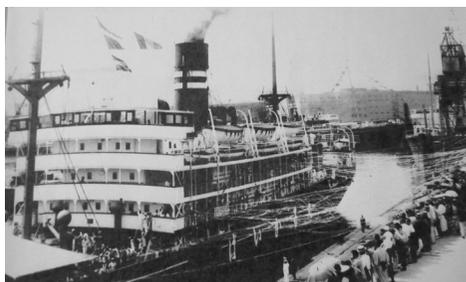
大連名所 連鎖街心斎橋通りの夜景

六、豆油（とおゆ）豆粕（まめかす）

あの山埠頭
別れの唄の
銅鑼（どら）が鳴る
故國通（かよ）ひか
上海（シャンハイ）行きか
切れたテープは
泪色（なみだいろ）



大連倉庫内の豆粕



東洋第一大連大埠頭定期船出帆の光景

【その三】

「大連引揚げの歌」は昭和21年の暮れ、もう一部で引揚げが始まっていた頃でした。住まいが連鎖街でしたので、常盤座近くの喫茶店「紫烟荘」に青年男女が集められて、オルグから『「大連引揚げの」が出来た。これから歌唱指導をするので、よく覚えて皆に伝え、意気盛んにして祖国へ帰るのだ』というような話があって、繰り返し演奏があり、幾度も歌って覚えたものでした。イデオロギーは兎も角、愈々日本に帰れるのだという喜びを噛み締めながらこの歌を歌っていました。

引揚げてからこの歌の歌詞を思い出して書き留めようと試みましたが、その一部がどうしても思い出せず諦めかけたとき、平成11年12月に、集英社刊（1995年）の『満洲の記録——満映フィルムに映された満洲』に、「僕ら満洲の少国民」と題する山田洋次映画監督と歌人・来嶋靖生先生（ご兩人とも大連一中の出身）の対談記事で、来嶋「そうこうしているうちに引揚げになったんだ。ある日の夜、どこかの地下室に集まってね、今から引揚げのための歌を発表するから、皆それを歌えって。『耳を澄ませばふるさとの、岸辺を洗う波の音』で始まって最後は『民主大連船出して、民主日本へ水脈を引く』なんていう歌を歌わされた（笑）」とあるのを見付け、出版社を通じて来嶋先生へ歌詞全部を教えてくださいをお願いしたところ、懇篤丁寧に全文と作詞・作曲は、大連放送管弦楽団の指揮者・山下

久氏で、その時は山下さんが自ら指揮棒を振って幾度か曲を演奏されたということまで、詳細に記されたご返事をいただき、やっと胸の支えが下りた気持ちでした。

【後日譚】

大分市で、大連関連資料等の提供活動をしていた20世紀大連会議の会報『The Great Connection』第9号（平成16年12月18日発行）に記載された「おちこちTopics③」から、抜粋転載します。

③大分県旅大同窓会が11月7日、第26回をもって閉幕した。閉幕にあたり、せめて茶番めいたことをやろうと、余興に大連で生まれた最後の歌「大連引揚げの歌」を、大中（大連中学校の略称）七夕会が本邦初公開で発表することになり、カラオケのマイクを滅多に握らない会員の提案に、七夕会総会は全員賛成で決定した。もともと資料は秦源治氏から寄せられたものがあつたので、メロディーさえ分かれば採譜し歌唱できると思った。早速、秦さんに連絡依頼したところ、病床の娘さんを督励し、採譜された楽譜が関係資料とともに送られて来た。

引揚げの歌を知らない人が多いので楽譜に忠実にメロディーを歌い、テープに入れて七夕会員が各自練習し、何とか会場の参加者に助けられながら本邦初公開を恙なく終了できた。旅

大同窓会の閉幕、本邦初公開と大連最後の歌、由緒に充ちた極どい余興でもあった。

大連引揚げの歌

作詞・作曲 山下久

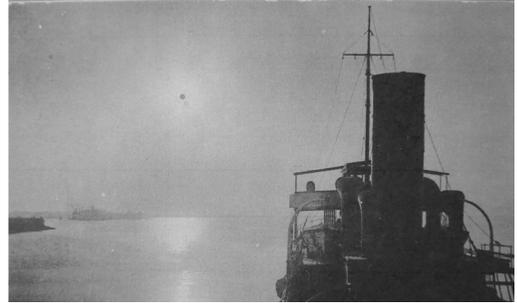
一、耳を澄ませばふるさとの 岸邊を洗ふ波の音 瞼（まぶた）の裏に浮かぶのは あゝ遠近（おちこち）の山の色 船が来た来たなつかしい 祖國へ歸る船が来た



佐世保港に上陸し針尾収容所へ向かう引揚者たち



大連引揚げ第一船「永徳丸」（6,923 噸）



夕陽に暮れゆく見納めの大連港 さらば！

二、山の有様野の景色 昔のまゝにあるかしら 僕の生まれたあの町は 冬の月照る焼け野原 この眼で見よう 戦争の あとの祖國の苦しみを

三、民主大連船出して 民主日本へ水脈（みお）を曳く 歸る祖國の山川が よし崩（くず）れても破れてもそこが我らの新天地 自由のための新天地